

## 「小児科」後期研修カリキュラム

### 1 研修医の資格について

2年間の卒後初期臨床研修を終了した者とする。

### 2 研修内容について

- (1) 医の倫理を体得し、高度な小児科専門知識と技術を修得する。
- (2) 小児科専門医の受験資格を十分に満足する内容にする。幅広い知識のみならず、小児科の中でも更に専門の分野を持てるよう努める。

### 3 研修期間について

卒後初期研修を終了後の3年間とする。

#### ・一般目標

市民病院では、以下の5つを後期研修3年間の一般目標とする。

- 1) 一般目標1：保護者との良好な関係を確立し、保護者からの信頼を得る。
  - (1) 保護者から患児に関する情報を聞き出す。
  - (2) 保護者と良好な関係を確立して、小児科医としての信頼を得る。
- 2) 一般目標2：小児の処置・治療の特殊性を理解する。
  - (1) 小児の点滴・採血法を理解する。
  - (2) 輸液や薬物療法の特殊性を理解する。
- 3) 一般目標3：小児救急を理解する。

救急外来には多数の患者が来院するが、それらに対応できるとともに、重症患者を見抜ける。
- 4) 新生児・低出生体重児の管理の基本が理解できる。
- 5) 小児慢性疾患の長期管理について理解できる。

#### ・到達目標

##### 1) 到達目標1（各年度における目標をあげる）

###### 1年目の目標

主に入院患者をできるだけ多く受け持ち、広い範囲で研修を行う。

- (1) 指導医とともに治療計画・検査計画の立案と実施、家族および本人への病状説明ができる。
- (2) 1年終了時には、一般的な小児疾患（肺炎・喘息・急性胃腸炎・川崎病・血液疾患・神経疾患・代謝内分泌疾患・悪性腫瘍など）の診療および正常新生児・病児の診療が

できる。

- (3) 救急患者の初期対応ができる。
- (4) 検査結果の解釈・病態把握ができる。

#### 2年目の目標

- (1) 一般的な疾患については、独立して治療・説明を行える。その後、指導医のチェックで問題点を解決する。
- (2) より専門性を要求される疾患の治療計画立案を行い、指導医とともに本人・家族への病状説明を行える。
- (3) 外来診療の診察ができる。迅速な判断が求められる外来で、自ら探求・勉強し続ける力および独自で働けるだけの力量を持てる。

#### 3年目の目標

- (1) ひとりの独立した医師として、適切な判断力のもとに良き臨床医として診療活動を実行できる。
- (2) 病棟では、前期研修医の指導ができる。
- (3) 3年終了時には、小児科専門医の受験資格が得られるとともに、十分な臨床経験から合格可能な実力を身につける。
- (4) 学会発表の機会を持つことにより、病態解明の理論的基礎、発表技術を習得できる。
- (5) subspecialty を視野に入れて専門分科領域を選択し、指導医とともに学ぶ。この時点では、希望に応じ徳島大学病院小児科で3カ月程度の専門領域研修が可能である。

#### 2) 到達目標2

各分野で専門性をもった知識と技術を習得する。(特に後期研修2～3年目で)

##### (1) 感染症・アレルギー

- 感染症の診断ができる。
- アレルギー疾患の診断と治療ができる。
- 喘息その他のアレルギー疾患の診断と治療を知っている。

##### (2) 腎・膠原病

- 腎疾患の病態を評価できる
- 尿所見や腎機能を的確に評価し腎病理診断に基づき病態を理解できる。
- 代表的疾患(ネフローゼ症候群等)の治療(使用方法と副作用)を説明できる。
- 膠原病の病態を評価できる。
- 輸血量を決定し、成分輸血を指示できる
- 特に、全身性エリテマトーデス等小児膠原病の薬物療法を説明できる。

##### (3) 代謝・内分泌

- 成長の評価ができる
- 成長曲線の作成や骨年齢測定等による成長障害の評価方法ができる。
- 性成熟の評価ができる
- 性成熟のメカニズムと正常な成熟過程を理解し、その異常を指摘できる。
- 主な先天性代謝異常症の治療法ができる。

##### (4) 神経

小児のけいれん重積およびてんかんの治療法が判る。

小児の脳波の基本的な見方を理解し、発作性異常波の有無が判る。

基本的なてんかんの薬物療法ができる。

小児の発達障害の診断ができる。

自閉症、知的障害、注意欠陥/多動性障害などの発達障害について理解できる。

それらの疾患に対して基本的対応ができる。

(5) 新生児

新生児仮死と呼吸障害の評価ができ、必要とされる処置の選択が正しくできる。

乳児健診の発達評価ができる。

低出生体重児の管理の基本が理解できる。

(6) 循環器

その先天性心疾患が重症かどうかの判定ができる。

心不全やチアノーゼの重症度を判定できる。

小児の心不全・不整脈薬物療法の基本が判る。

基本的な薬剤の使用法と副作用が理解できる。

(7) 血液腫瘍

血液疾患の診断法の基本が判る。

骨髄検査の方法を身につけ、その解釈ができる。

化学療法の基本が判る。

基本的な化学療法剤の使用法とその副作用が理解できる。

また、化学療法時に支持療法の基本がわかる。

・ 修練方略および評価方法

1) 小児科においては、専門医資格を獲得することで「小児科医」として評価されることになる。経験症例の日本小児科学会へのレポート提出と筆記試験に合格する必要がある。

2) 後期研修 3 年を終了し、優秀な成績を残し、引き続き市民病院の勤務を希望する場合、医局員数に余裕があればスタッフとして就職することも可能である。